

学問のすすめ

二〇一七年四月十二日

バイブル・サービス

加藤 美紀

新年度がスタートしました。四月になると、昨年度はうまくいかなかったことでも、また新しい気持ちで取り組んでみようという意欲がわいてくるものです。新入生は、初めての大学生活に不安を抱きながらも、一生懸命学ぼうという意欲をかきたてている方が多いと思いますし、二年生以上の方々は、心機一転、今度こそ勉学に励もうと思っておられるでしょう。

今日は、明治時代の大ベストセラー書、福沢諭吉の『学問のすすめ』を取り上げて、学問の意味をしばし考えてみたいと思います。その昔、朝日新聞で日本人の好きな政治家ランキング調査がありました。一位が坂本龍馬、福沢諭吉は七位くらいだったと記憶します。日本人には一万円札の肖像としてお馴染みですよ。慶應義塾の創立者としても有名です。ある国が栄えるのは教育から、という考えのもと「慶應があるかぎり日本は世界の文明国」と言えるほどの気概をもって大学を建てたのですから、本当に志の高い人です。実際どのような人物だったのでしょうか。諭吉は何度も政界入りを勧められましたが断っていて、政治上の野心は全く示さず、教育者、啓蒙思想家として名を残すことになります。当時はまだ、江戸時代の「士農工商」の身分制度による閉塞感が残っていて、尊皇攘夷

論と開国論で国は二分されていましたが、諭吉は文明開国を目指して洋学から盛んに学ぼうとする立場でした。この諭吉さん、大変な酒豪だったようですが、志操堅固で、日本人も欧米諸国に匹敵する倫理性の高さをもつべき、つまり文字通りの一夫一婦制を徹底すべしという考えを貫き、「身をつつしみ品行を正しくすることは自然に身に備わっていた」と自分でも語っているほどです。とても良き家庭人でもあって、四男五女あわせて九人の父親となりますが、生まれた子供が男だためだがり女だとかっかりする当時の風潮のなかで、「腹の底から男女長少問わずこれを愛して兎の毛ほども分け隔てない」育て方をしました。教育学概論の授業でこの話をする時、毎年必ず何人かは「諭吉さんみたいな人と結婚したい」と感想に書く学生さんがいますが、それはよい趣味だと思います。

海外への憧れも強く、アメリカに二回、ヨーロッパに一回留学していて、その過程でシンガポール、スエズ海峡、地中海、パリ、ロンドン、アムステルダム、ベルリン、リスボン、ペテルブルクなども旅しています。英語も「数年間に物狂いで勉強した」ものの、横浜で英語の看板が読めなかったときに自分があれば苦労して学んだのが実はオランダ語だったと分かり「誠に情けなく辛い話」と愕然とし、「実に落胆してしまった」と自伝に書き記しています。ですが、すぐに気を取り直して今度は猛烈に英語学習に取り組むのです。結局、発音は違うものの文法が似ているためオランダ語学習も無駄にはならなかったと語っています。この『福翁自伝』は口語体で生き生きと表現されていますから大衆に影響力をもち、自伝文学の傑作と称されるほどの本なので、是非皆さんも手にとって読んでみてくださいね。

このなかで諭吉は、勉強するときの注意も述べています。「将来どうなるかばかり心配し、どうしたら立身出世できるだろうか、お金が入るだろうか、立派な家に住めるだろうか、どうすればうまいものを食べ、よい着物を着られるだろうか、というようなことばかりに心惹かれてはまともな勉強はできない」と書いています。他

方、諭吉は衣食と体のことを大切にした人でもあって、「青白い学者よりは筋骨たくましい無学の方がよい」とも語っています。なお、諭吉は長崎や大阪で勉強しますが、当時の江戸の書生よりも落ち着いて静かに勉強に打ち込めたのがよかったと本人は考えていました。この点、仙台は適度に活気があり、学都といわれるだけあって学問に適した街だと思えます。ちなみに、『福翁自伝』のラストではこれからの社会で必要なこと三か条を挙げています。

① 文明国にふさわしく男女の気品を高尚にすること、② 大金を投じてよいから学問研究をすること、③ 仏教でもキリスト教（耶蘇教）でもいいからこれを引き立てて民心を和らげること。さすがいいことを言いますね。

これからお話する『学問のすすめ』は、諭吉三十九〜四十三歳の時に書かれた中年期の傑作で、福沢著作群の最高峰ともいわれます。皆様ご存知のように、『学問のすすめ』は、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という有名な言葉が始まります。人間は皆平等だというわけです。今の私たちにとってみれば、そんなの当たり前かもしれませんが、江戸時代からの強固な身分制度に縛られて閉塞的な社会で生きてきた当時の人たちにとっては、自分を解放してくれるような、人間のありようの本質に目覚めさせてくれるような、まさに啓蒙的で斬新な響きがあったことでしょう。しかし、二十一世紀に生きる私に感動をもたらしてくれたのは、その次の部分です。「万人は生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きをもって……自由自在……なのだ」という文章が続きます。人はみんな生まれたときから上だとか下だとかの区別なく、自由自在なのだ、人間は自由な存在であると福沢諭吉は繰り返しているのです。「人の一身も一国も、天の道理に基づきて不羈自由なるものなれば、もしこの一身の自由を妨げんとする者あらば、世界万国を敵とするも恐るるに足らず」と言い切っています。そして、結論から言ってしまうですが、学問をする意義は、人間が生まれつきもっているこの自由を他の誰かに妨げられないためだと諭吉は考えているようです。いわば人間が思う存分に天性の自由を生きるために学問が必要なのだ

ということです。

諭吉によれば、本来平等であるはずの人間世界を見渡すと、賢い人もいれば愚かな人もいて、貧しい人もいれば富んでいる人もいます。社会的地位の高い人もいれば、身分の低い人もいます。このような雲泥の差を生みだしているものは何かといえ、それはひとえに「学ぶと学ばざることによっていでくるなり」、つまり、学問をしているか学問をしていないか、の違いにかかっている、というのです。面白いのは、諭吉はもともと迷信や占いまじいの類は一切信じない「カラリとした気質」だと自伝で語っていますが、ここでも、身分の高い低い、富をもっているか貧しいかの格差は、天が定めた運命ではなく、本人の働きのかかっていると述べていることでは、「本人の働き」とは何かといえ、それは「学問をする」ということです。生まれながら平等な人間同士の間には社会的な差がつくのは、学問をしたかどうかの違いだということです。「ただその人に学問の力あるとなきとによってその相違もいできたるのみ」とスパッと言い切ります。「ただ学問を修めて物事をよく知る人は尊敬される立場に着き、富んだ人となるが、無学な人は人から卑しめられ、貧しくなる」とまで述べています。

ここまで言ってしまうていいのかと思う面もあります。諭吉は大変な秀才だったようですから、これはちょっと厳しい見方といえるかもしれません。すべての人が一生懸命学んだからといって、自分の生まれながらの自由を確保できるほどの才覚をもちえないでしょう。やはり運命にいたずらに翻弄されることもあるのが人間の定めだという気がするところもあります。しかし、学問をすることの意義が人間が自由に生きるためであるという洞察は、とても本質的なものとして覚えていたいと思います。

時代背景をみると、『学問のすすめ』は明治五年から五年間かけて執筆されました。長年の鎖国を解いて開国し、文明開化に憧れながらも欧米列強との付き合い方をはかりかねていた当時、大国に支配されないで日本の独立を保

つためには、もっと危機感をもって学問をすべきだと大衆を激励しているのかもしれない。アメリカやヨーロッパに渡って西洋の学問を批判的に学び、科学的思考の得意な合理主義者で何らかの宗教の信徒ではなかった論吉が、この本の第二編で、こんなことを言っています。「人の生まるるは天の然らしむところにて人力にあらず」。しかも人間はもともと一人の同じ父親と一人の同じ母親から生まれてきた同じ一つの家に住む兄弟であるとさえ言っています。それなのに人が人を支配したり人に支配されたりしてはならないのだ、という強いメッセージがあるのだと思います。だから、「氣力を確かにして」「学問を志し」、誰にも妨げられない一人の独立した一人前の人間としての自由を求めるべきであるとこんこんと説いています。

では、論吉がそこまで大切にしている人間の自由とは何なのでしょう。論吉が人間の自由を説明するなかで、私が一番印象的だったのは次のくだりです。これは第三編に出てくる部分です。「独立の氣力なき者は必ず人に依頼する、人に依頼する者は必ず人を恐れる、人を恐れる者は必ず人にへつらう者となる。常に人を恐れ人にへつらう者は、次第にこれに慣れ、その面の皮鉄の如くなりぬ」と書いてあります。つまり、自分自身の頭で自由に考えたり、自分の意志で自由に動こうとしなければ、他人に依存して人に言われるがままに行動し、力のある人や偉い人があつたから、こう言ったから、ということでも振り回され、やがて他人に操られて動くようになり、ついには悪事さえ犯しかねない、ということです。言ってみれば、自分自身の人生を生き抜くために学問をすることが不可欠だということでしょう。

学問の仕方についても述べています。「学問をするには分限を知ること肝要なり」と論吉は言います。「分限を知るといふのは、「自分の分をわきまえる。自分の限界をわきまえる」ということではないかと思えます。「人の天性生まれつきは、繋がれず縛られず……自由自在な者」であるけれども、「他人を妨げずに自分自身の自由を達す

る」ことが自分の分をわきまえることであると云います。

ところで、諭吉が人を自由にする学問として勧めた「学問」とは何を指すのかといえば、実学です。「専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」と言っています。ここでいう実学とは当時のエリートの必修の学問とされた漢学や儒学に対立するものだそうです。具体的には、読み書き・そろばん、手紙の文言や言葉の使い方、地理や歴史や経済や天地万物の仕組みを学ぶこと、外国語の勉強や西洋の書物を読むこと、修身を学んで人との交際や世の渡り方も学ぶべきだと挙げています。このようにして諭吉が「実学」の大切さを説く過程で、引き合いに出している禅宗の僧の話は目を引きました。「禅宗が説いている道理はすこぶる玄妙（味わいがある）で高尚だが、禅道に通じているはずの僧侶も、その所業を見れば迂遠（うえん・直接の役に立たない）にして用に適せず、事実においては漠然として何らの見識もなき者に等し」、つまり僧侶の学問は現実には何の役にも立っていないと諭吉は述べています。また、日夜学問の道に精進しているはずの学者といえども、品行が高尚とはいえず、自分自身の定見とか見識に欠ける者がどうして出てくるのか、という問いかけのなかで、諭吉は、「自らに満足してはいけない、上流に向かえ、常に上を目指せ」というようなことを言います。

このようにして実学中心に学んだ学問を生かす方法についても述べています。第十七編の「人望」について描いている章はとても興味深い箇所です。「あの人は確かな人だ、頼もしい人物だ、あの人ならこの仕事を任せても必ず成就するだろう」と当てにされ、望みをかけられる人を称して「人望のある人」と言いますが、人間世界では、「人望の大小軽重はあれども、かりそめにも人に当てにされる人でなければ、いくら学問を積んでも何の用にも立たない」と諭吉は述べています。平素から人の人望を得ていなければ物事は成就しないというのです。では、どのようにして人望が得られるのか、ということまで諭吉は教えてくれます。諭吉によれば、人望とは力量によって得

られるものではなく、金銭や身分によっても得られません。ただその人の「活発なる才智の働きと正直なる本心の徳義とをもって次第に積んで得るべきものなり」と言います。

そのための具体的な方法まで諭吉は挙げています。第一に言葉の使い方をよく学ぶことです。不自由な思いをしないうためには、自分の思うところをなるべく流暢に話せるようになるべきだと言います。第二に、「顔色容貌を快くして活発愉快なる人」であること、つまり、「苦虫をかみつぶしたような表情をしたり、戸口に骸骨をぶらさげて門前に棺おけを安置するような陰気な態度ではなく」、挙動が明るく、どんな人でも気楽に親しみ近づけるような雰囲気を持っていることが大事だと言います。第三に、他人は鬼でも蛇でもないのだから、何ら恐れはばかることなく、人を毛嫌いせず、自分の為にも世の為にも広く交際しなさいと勧めます。今でいうビジネスマン向けの自己啓発書のような具体的アドヴァイスも盛りだくさんなこの『学問のすすめ』を当時の日本人百六十人に一人が持っていた、とされる理由がわかる気がします。

それでは、イエスは学問をどのように考えていたのでしょうか。私達の大学のルーツである修道会の保護者、聖パウロが「学問のしすぎで頭がおかしくなった」とローマ総督フェストゥスから言われたことが新約聖書の「使徒言行録」に記されているのは対照的に、イエスは、「この人は学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をごんごんによく知っているのだろう」とユダヤ人たちに驚かれています。イエスは当時のユダヤ社会のおそらく最貧層ではないにしても中流よりは下層に位置する社会階層に生まれ、エリート教育を受けることができたはずはなく、おそらく読み書きはできず、旧約聖書を耳で聞いて学んでいたと言われます。新約聖書も一文字も自分では書いていません。ですが、すでに十二歳のときに神殿で律法学者たちを相手に問答し、その受け答えの賢さにみんなから感嘆されたことが福音書に出てきます。大人になってからのイエスは、律法学者たちが、神の御心が聖書の文字に

記されていると思ひ込んで律法の解釈に血眼になっていることを揶揄しています。紙のなかに神の御心が書いてあると思つたら大間違いだと思ひます。では神の御心はどこにあるのかといへば、私たち人間の心に書き記されていると言います。人々を感嘆させる知恵の言葉も、自分から出たものではなく、自分を遣わした神の御心のままに語っているのだ、とイエスは言います。イエスにとって学ぶべき学問は、天の国のことや神の御心であるようで、「天の国のことを学んだ学者」という表現のときだけ、「学者」を肯定的に語る場面があります。

ですがだからといって、イエスの話が地に足のつかない抽象的な話かといえば全然違います。大工が生業だったイエスの語るたとえ話は、身近な生活を題材にとつた具体的なものが多く、生活世界をよく観察していた人であることがうかがえます。ちなみに福沢諭吉は下級武士の常として、少年時代から手工労働、いわゆる手仕事をよくこなし、実際のな面にも長けていたようです。かんなどかのみとか買い集めて何かこしらえたりつくろつたりするのも巧みだったと自伝に書いています。イエスの場合も、直感的なひらめきから飛躍した言葉も発していますが、相手をみてなるべく卑近な生活世界と結びつけたたとえ話をしています。自然界をよく観察して、具象世界から神の摂理をおしはかることができる、とも言っています。そのイエスの言葉のなかに「真理は人を自由にする」というものがあります。

ここで諭吉のいう「学問」とイエスのいう「真理」を結びつけようなどという乱暴なことは考えませんが、ちょっとだけ共通点が感じられます。福沢諭吉が学問を勧めるのは、学問が人を自由にするからです。イエスが真理を求めよう人に人を促すのは、真理が人を自由にするからです。大学で学問をし、真理を探究する私たちは、新年度を始めるにあたって、改めて、人間に本来の自由を取り戻させてくれるような学問や真理を追究していきたいと思ひます。

(グローバル・スタディーズ学科准教授)